

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370386

研究課題名(和文)チリにおける反詩の系譜：ニカノール・パラとエンリケ・リンの文学に関する総合的研究

研究課題名(英文)The Lineage of Chilean Antipoem: A Study on Nicanor Parra and Enrique Lihn

研究代表者

松本 健二 (Matsumoto, Kenji)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・准教授

研究者番号：00283838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：チリの詩人ニカノール・パラ(1914-)は1954年の第一詩集『詩と反詩』以降、ラテンアメリカ現代詩を様々な形でリードし続けてきた。反詩とは、平明で口語的な語句を用い、卑近で個人的なテーマを扱うというスタイルであるが、同時に、堅苦しい伝統的文学や硬直した《詩的なもの》をユーモアやアイロニーをこめて嘲笑する創作姿勢でもある。いっぽうその反詩を当初から支持した同じチリのエンリケ・リン(1929-88)は、ロマン主義的で古風な作風を維持しつつも、独自の前衛的スタイルを確立し、パラが始めた反詩という一つの系譜に新たな路線を加え、軍政期以降の若い作家たちにとっての精神的支柱となっていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：A Chilean poet, Nicanor Parra (1914-), after publishing his first collection Poems and Antipoems in 1954, has been playing a leading role in the contemporary poetry. Antipoem is composed with plain and colloquial expressions to talk on the familiar and personal subjects. And its attitude is to ridicule with much humor and sarcasm a formal traditional literature and a rigid something typical of poetry. Another Chilean poet Enrique Lihn (1929-88) favored Antipoem from the beginning of his career. Even though he followed an old-fashioned style of romanticism, at the same time he established his original avant-garde style. Through the investigations, it became clear that Lihn added a new line to the lineage of Chilean Antipoem started by Parra and became a spiritual pillar for younger writers of the post-military rule.

研究分野：ラテンアメリカ文学

キーワード：ラテンアメリカ現代詩 前衛詩 チリ文学 モダニズム ポストモダニズム

1. 研究開始当初の背景

スペインからラテンアメリカ諸国、さらに米国のヒスパニック系コミュニティをも含むスペイン語圏全般においては、21世紀の今なお様々なレベルで詩に関係する発信行為が盛んである。なかでもチリは、10行詩デシマ等の即興民衆詩の伝統から、すでに2人のノーベル文学賞詩人（ガブリエラ・ミストラル、パブロ・ネルーダ）を輩出している文学に至るまで、まさに詩の王国と呼ばれるにふさわしい活況を呈し続けている。21世紀にかけて翻訳を介して世界的に読まれるようになったチリ出身の小説家ロベルト・ボラーニョも実はメキシコのアングラ詩の世界からスタートした「詩人作家」であるし、チリ出身で世界的な映画監督として活躍し続けるアレハンドロ・ホドロフスキーもまた、若き日のエンリケ・リンら詩人との交流をその創作の原点に位置付けている。

もちろん21世紀の世界的な文学受容のコンテクストにおいて、詩は、小説などに比してマイナージャンル化していると言わざるを得ない。スペイン語圏文学も例外ではなく、スペインでは20世紀前半にフェデリコ・ガルシア・ロルカ、フアン・ラモン・ヒメネスという大詩人を輩出するもその後は1930年代の内戦を経て低迷、詩を書く作家は多いものの、もはや詩はスペインにおける各種文化受容の中心的位置にはいない。ラテンアメリカでも20世紀初頭のモデルニスモを経て（若き日の）ホルヘ・ルイス・ボルヘス、セサル・バジェホ、ピセンテ・ウイドプロ、ネルーダといったいわゆる前衛の時代には大詩人が生まれたが、その後は、既にオクタビオ・パスが1974年に詩論『泥の子どもたち』において「アヴァンギャルドの黄昏」という言葉を用いて、二流の社会主義リアリズム（抗議の文学）詩とマンネリ化した前衛（土着化したシュルレアリスム）詩に拡散してしまったと指摘している通りであり、もはや詩は読まれず、1960年代以降に勃興した魔術的リアリズム等を特徴とする小説の《ブーム》の勢いに、かつて各国文壇で栄華を誇ったその存在感はすっかり色あせたかに見えた。

20世紀後半に入り、文学スタイルの先端的刷新の主要舞台が英米圏のポストモダン小説やラテンアメリカの実験的小説等へと徐々に移行し、また各種メディア環境の急速な変化に伴って活字以外の表現媒体・手段の種類が増殖した結果、人が特定の場に集まって特定テキストを共有する（詩の朗読会）韻文テキストを一人で鑑賞する（詩の読書）といった詩の受容の場が社会で占める意義そのものが相対的に低下、いわば世界的な規模で詩の第二芸術化が進行し、詩はある意味でオリンポスの山（文化における特権的地位）を自ら降りざるを得ない環境に追い込まれていたとも言えるだろう。

こうした状況下、研究代表者はかねてよりセサル・バジェホ等の20世紀前半、すなわ

ち《スペイン語詩最後の黄金期》を代表するラテンアメリカ詩人を主たる研究対象としつつ、同時に、ブーム期以降に勃興しつつある新しい世代のラテンアメリカ小説にも注意を払うという、いわば二重の研究スタイルを採用してきたが、そのなかでどうしても解けない謎のひとつが20世紀後半のチリにおける奇妙に盛んな詩の動向であった。その中心にいたのがニカノール・パラ（Nicanor Parra, 1968-）とエンリケ・リン（Enrique Lihn, 1928-88）である。

パラについては、反詩という前衛の文脈を想起させる詩作のスタンスが、なぜこの詩が読まれなくなった現代にいたるまで影響力を行使しているのか、英語に翻訳されたその詩が米国等で今なお読まれているのはなぜか、といったことが真っ先に気になった。いっぽうリンについては、パラの反詩を世に送り出したプロデューサーとしての役割や軍政期にチリに残った代表的作家としてアングラ文化の旗手となっていった経緯は文学史で語られていたが、その反時代的である種ロマン主義的ともいえる詩と反詩との接点が気になっていた。ボラーニョがその短編小説「エンリケ・リンとの邂逅」（短編小説集『売女の人殺し』松本健二訳、白水社に所収）でオマージュを捧げているように、チリでは詩人のみならず若い世代の小説家の間でも、今なおリンのことを、軍政期を生き延びた文学者のシンボルとして崇拜する傾向がある。これも研究代表者が現役チリ人作家と交流するなかで気になっていたポイントのひとつである。

詩が文化の第一線から退いた時代であって、チリではむしろ詩がさまざまに拡散してしまっただけでなく、表象文化全般を繋ぎ留める軸として機能しているのではないか。その鍵となるのはパラの始めた反詩という文学なのではないか。その反詩文学のもっていた批判精神、躍動感、ユーモア、創造性は、実はジャンルを超えてチリの現代文学に継承されているのではないか。本研究は、こうした背景と関心をもとに組み立てられることになった。

2. 研究の目的

本研究は、チリの詩人ニカノール・パラによって想起された「反詩」という詩作スタイルをめぐって、その実態を作品に即して明らかにするとともに、同じ詩人のエンリケ・リンによってどのように継承、発展されていったのかを検証し、ラテンアメリカ全般で20世紀後半に入っていったん途絶えたかに見える詩的前衛の命脈が今なおしぶとく生き続けているチリ文学のダイナミックな現状を、その原点に遡って考察するものである。

従来のパラ研究は特定の作品を対象とする狭いレンジでの分析が主流で、後続詩人や同時代の他言語詩人との比較などを介した総合的な研究は少ないと思われた。いっぽうリン研究は研究そのものの数が少ないように思われたが、それ以上に、リンが詩人として評価

さえることに無関心で、軍政期以降はサンティアゴのアングラ文化界の道化的存在に徹したことから、公的な文学史では、ネルーダ等の先行詩人と比較し得る詩人とすら看做されていない実態があるように思われた。リンがパラと並んで反詩というスタイルをチリに根付かせるのに貢献したとする立場の論考は非常に少ないと思われたのである。

本研究は、二人の詩人のテキスト分析を中心に、チリにおける反詩の源流を明らかにすると共に、より広義の「反詩的」言説が絵画などを含む表象文化全般に拡大していった過程をも視野に入れつつ、16年間の軍政時代に眠っていた現代チリ文学の脈脈を総合的に検証するものである。

3. 研究の方法

基本的には資料収集とテキスト分析、それらを踏まえたうえでの検証と論文執筆というプロセスを踏む。年次進行として、平成26年度は主としてパラに関する資料収集と分析を、27年度はリンに関する資料収集と分析を、最終年度は軍政期以降の反詩に関する言説に関する資料収集を中心に、前の2年間で行った作業の総括を中心に研究を行なう計画を立てた。

特にリンの詩作品については学術的な校訂を経た全集、選集等が存在せず、まずは刊行物の初版を突き止め、それを現地(サンティアゴ)で確認する作業から始める必要があることが予測され、チリでの資料収集を数度に分けて行う必要があると考えられた。またパラに関しては、1970年代から米国でも積極的に作品が受容され、その結果として米国等の英語圏での先行研究が多いことが予測された。こちらは英語圏博士論文等の情報に詳しい専門業者に依頼して、資料の整備を進める必要があると考えられた。

情報の発信に関しては、論文刊行を前提としつつ、詩のテキストの翻訳発表、さらには各種学会、研究会で海外現代詩を専門とする研究者を対象として意見交換を行う等の方法を想定していた。

4. 研究成果

反詩とは、正確には1954年に刊行されたパラの詩集『詩と反詩』の題で使用されたスペイン語 *antipoema* を指す。このスペイン語自体は1920年代以降、スペイン語圏の前衛詩運動のなかで数回使用されたこともあり、また仏語にも前例があり、珍しいものではないが、このパラの詩集以降、スペイン語圏ではパラ的な詩風を指す語として定着していくことになる。

従来の反詩は詩全般に対する *anti* という、いわば前衛的反抗の態度表明であったと考えられるが、パラの反詩が *anti* の対象としたものは先行するいくつかの詩人の具体的な作風である。一般的には1950年に長編叙事詩『すべての歌』を刊行してラテンアメリカ全体を

代表する公式スポークスマン的な存在となっていたパブロ・ネルーダへのアンチであったと言われることが多いのだが、初期の作風やパラ自身へのインタビュー、さらには1950年代のチリにおける文学者どうしの関係などを分析した資料を調べるうちに、当時のパラにとってはネルーダ以外にもいくつか *anti* の対象としていた存在があることがわかってきた。

20世紀初頭のモデルニスム期に顕著な詩人を輩出していなかったチリでは、1930年代以降に三つの詩的エスタブリッシュメントが構築される。ひとつはクレアシオニスムの創始者でラテンアメリカ詩の前衛を代表するピセンテ・ウイドブロから、シュルレアリスムのチリ版ともいえるマンドラゴラ派を率いたブラウリオ・アレナスへとつながる、いわば『フランス型アヴァンギャルド路線』である。いっぽう、チリ性を重視しつつ、独自の社会派路線で国内詩人の支持を集めていたのがパブロ・デ・ローカで、こちらは『社会派路線』と言える。そしてその両方の資質を兼ね備えた巨人ネルーダが、派閥というよりは1人でチリ詩を体現するようになったのが1950年代以降である。これを1950年の『すべての歌』になぞらえれば、ホイットマン流の『大きな詩の路線』、いわばチリ版の国民詩路線と言えるだろう。パラの『詩と反詩』は、このような三つのエスタブリッシュメントが互いに争い合い、大勢の支持者をチリ国内に有していた時代に現れた。

いっぽう、これは英語圏の先行研究(1970年代から米国でパラを扱った博士論文が数点提出されていた)が提示している知見であるが、米大陸全体の近代詩を俯瞰的に見ると、ホイットマンからパウンドを経てウィリアム・カーロス・ウィリアムズやロバート・ローウェルへと至る北米詩の流れが、ネルーダからパラやリンへと至る流れにおいてそのプロセスが再生産されていると考えることも可能である。パラは1950年代には英国に滞在しT.S.エリオットやジョン・ダン等の英国詩に親しみ、また1960年代に米国の大学に滞在、アレン・ギンズバーグやローレンス・ファリンググッティらと親交を結ぶなど、英語詩との関係性が他のラテンアメリカ詩人に比べて極めて濃い作家でもある。こうした観点に立つならば、20世紀初頭までに構築された(チリの場合は1950年代に完成される)国家や文化的共同体全体を主たるターゲットにした叙事詩的で神話的な詩のあり方へのひとつの反動として生まれた詩、北米をも含むモダニズム以降の詩という観点でパラの反詩を分類することも可能である。

では具体的に反詩とは何か。パラの『詩と反詩』は題が示すように従来型の詩も混在しているとされる。そして全体3章のうち最終の3章にまとめられているのが反詩とされているが、そこに共通する特徴、特質を列挙していくならば、アイロニー、ユーモア、自己

言及性、散文性、口語文体、といったものになるだろう。とりわけ日常的な口語使用を前提とする文体は反詩の形式上の定義で重要な位置を占めている。いっぽう、テーマについては、ネルーダ風の壮大さ、スペイン語でいう *grandilocuencia* (美文調) へのアンチとして日常的なもの、小市民的で卑近なものが優先的に選択されていることは確かだが、都市的で、時としてカフカ的な不条理がテーマになっていることも多く、従来小説などの散文で表現されることの多かった知的なテーマも混在しているのが特徴である。

上述した 1950 年代のチリにおける三つの詩的エスタブリッシュメントとの対応関係で考えるなら、まず《フランス型アヴァンギャルド路線》の中心となっているシュルレアリスム的なイメージ優先の文体に対し、数学者でもあるパラの反詩は、英国流の知的で思索的な文体を好む傾向にある。次にローカ等のいわゆる《社会派路線》が好むアンガージュマンの文学、社会変革を訴える「呼びかけの文学」に対して、パラの反詩は、日常に潜む普遍的で誰にでも感知可能な不条理といったテーマを軸としつつ万人に向け平易な共感を求める姿勢を好む。最後に、ネルーダ流の《大きな詩の路線》に対し、パラの反詩は、より市民的で個別的で、時として崇高さや尊厳というものを極端に欠く卑近なものを好んでテーマに選択する。

パラの反詩は上述したように米国で 1950 年代以降に現れたビート世代の詩人たちの共感を得ているという意味では、ギンズバーグ等と同じ文脈で論じることが可能かもしれないが、初期の反詩のもうひとつの特徴として視覚性が挙げられ、これはポエトリー・リーディング等の音響性には合致しない。ただ、反詩を即興性という観点から見た場合、1950 年代初期にパラがリンやホドロフスキーに誘われてサンティアゴ市内で公表したコラージュの壁新聞 *Quebrantahuesos* の存在は重要である。このパフォーマンスを介して、反詩をめぐる長期的な言説の中に、もう一つの大きな特質である《視覚性》が登場することになる。そしてパラは 1972 年に視覚詩という新たな世界を切り開くことになった。

作品『アルテファクト』は、パラが書いた 3～5 行の短詩をもとに、イラストレーターが (パラの手を離れた場所で) 構成したコラージュをあしらった絵葉書 242 枚 (を収めたボックス) で構成されている。テーマは様々だが、詩人の書いたテキストが詩人のコントロールを離れてイラストレーターのような造形芸術家の手に委ねられるというプロセスそのものが注目し、こうした視覚芸術と詩のコラボレーションは軍政期以降のチリにおいて重要な表現手段のひとつとなっていく。

いっぽう『アルテファクト』が発表されたのはチリにとって社会主義政権が発足して 2 年後、そして 73 年の軍事クーデターの 1 年前という微妙な時期に当たり、そこで表現され

ていたキューバ革命体制やアジェンデ社会主義政権を揶揄するような文句の数々が反響を巻き起こし、パラはキューバとチリの体制寄りの文学者らからある種のパージに遭うことになる。もともと《社会派路線》と距離を保つクールなスタイルを採用していた反詩がチリにおける《政治の時代》に遭遇したこの皮肉な出来事は、その後の反詩的言説におけるイデオロギーとの距離感を決定づけることにもなった。

この時期に同様のパージを経験しているのがリンである。1950 年代にパラによる反詩をプロデュースすることになったリンは、その後 1963 年に詩集『暗い部屋』を刊行、ミニマルな私的体験を独自の耽美的な文体と断片化されたイメージに託した世界を構築、アイロニーに満ちたパラの反詩とは違うひとつのスタイルを確立する。その後、ラテンアメリカ文学の小説がブームを巻き起こしていった時代に、リンはバルセロナやパリを転々としつつ反時代的な、抒情的でロマン主義的な詩をサンティアゴの狭い世界で発信し続けるわけだが、キューバにおける言論弾圧、いわゆるパディージャ事件を境にアジェンデ政権の文化政策から疎外され、そのまま 73 年のクーデターを迎えてしまう。こうしてリンは旧アジェンデ政権の左派知識人からも軍事政権の検閲からも実質黙殺される形で軍政期を生き延びた。

パラはその後、実在した宗教者の説教というスタイルの詩や、1980 年代には環境詩という分野に進出、またカタルーニャの視覚詩人 ジョアン・プロッサと写真を用いた共同視覚詩に挑戦するなど、反詩の新たな路線を独自に展開していくことになる。いっぽうのリンは軍政期に美術批評に手を染め、若い世代のチリ人芸術家に積極的に関与しつつ、クーデター前と変わらぬ地味な詩作を続け、後続する世代、いわばポスト軍政期の表現者たちを束ねるひとつの象徴的存在と化していく。

反詩とは、限定的には、パラの詩作を特徴づける創作論と定義づけることができるが、広義には、1950 年代以降に様々な形でチリの表現者が展開した《新しい創造をめぐる絶えざる模索の動き》であるとも定義できるだろう。前衛の極端な自閉症の実験に走るのではなく、安手の抗議の文学に墮すのではなく、そうかといって美文調の大きな表現に向かうのではなく、数少ない読者 (そのほとんどは表現者であろう) の身近なところで、あくまで誰にでも共有できる詩的体験の在り方を根気よく提示し続けた詩人たち。パラとリンに代表される 1950 年代から 70 年代、さらに 80 年代のポスト軍政期にかけての創作者たちの血統を総称して《チリにおける反詩の系譜》と呼ぶのはそう無理のあることあるまい。造形芸術など新たな表現媒介への積極的な関与、イデオロギーや政治的言説との慎重かつ節度ある距離感、都市におけるミニマルな日常性へのこだわり、アイロニー、自己韜晦、何よ

りも、リンに特徴的なあの奇妙なまでに穏やかな寛大さ。そして、そうしたパラやリンが打ち立てた《反詩の系譜》の延長戦上に現れることになるのが、たとえばディエゴ・マキエイラ、フアン・ルイス・マルティネスといった造形芸術と詩作を自由に往来する詩人たちであり、またラウル・スリータのような詩作の舞台をチリの自然やニューヨークの空にまで拡大した破天荒な詩人であり、ポスト軍政期の文化的和解プロセスに当たって写真家パス・エラスリスと重要な仕事を完成させることになる作家ディアメラ・エルティッツであり、さらには小説で独自の世界を打ち立てることになったロベルト・ボラーニョやアレハンドロ・サンブラなのである。

チリには2016年にパウリナ・フローレスという27歳の作家が彗星のように現れた。短編集『恥さらし』は、ラテンアメリカ圏最大の貧富の格差にあえぐ《新自由主義の実験地》チリの貧困層の実態を、チャーホフ的で地味な文体で、淡々と描き出していく。彼女のように、優秀ではあるが、ある種、時代錯誤な若手作家が表れてきた背景には、反詩の系譜を生み出したチリ独自の近代文学の在り方が関与しているのかもしれない。反詩は直前世代に支配的だった文学形式に反発するという、ある意味できわめて近代的なオリジナリティのパラダイムに則った文学運動であり、そうした近代文学のパラダイムやダイナミズムそのものを全否定するわけではなく、むしろ積極的に利用している。パラは1990年代にチリの民謡に回帰し、また70年代には絶対にしないと公言していた朗読会も積極的に行っている。リンは時たま思い出したように伝統的ソネットを書いていた。オクタビオ・パスの言う近代詩の《断絶の伝統》に内在する離反と反復のダイナミズムを20世紀後半にも維持し続けたのが反詩の系譜であり、その活力は21世紀の今なお若い世代によって継承されていると考えることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

松本健二、暗室のナルシス エンリケ・リンの初期詩学に関する考察、Estudios Hispánicos、査読無、41号、2017年、77-104

松本健二、反詩の第二段階 ニカノール・パラ『アルテファクト』をめぐって、Estudios Hispánicos、査読無、41号、2017年、45-75

松本健二、躍動するアイロニー ニカノール・パラ『詩と反詩』に関する一考察、Estudios Hispánicos、査読無、40号、2016年、39-64

松本健二、(翻訳)ニカノール・パラ『詩と反詩』、Estudios Hispánicos、査読無、39号、2015年、51-63

[学会発表](計2件)

松本健二、反詩の第二段階 ニカノール・パラ『仕掛け』に関する考察、東京スペイン語文学研究会、2017年1月28日、東京大学駒場キャンパス

松本健二、エンリケ・リンの詩学 ピノチェト時代を生き延びた詩人、東京スペイン語文学研究会、2016年7月16日、東京大学駒場キャンパス

6. 研究組織

(1)研究代表者

松本 健二 (MATSUMOTO Kenji)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：00283838